望遠鏡観測部門報告　Report of Telescopic Meteor observations inJune,2005　No.256

担当幹事　殿村　泰弘(Tonomura Yasuhiro）宮城県富谷町（Tomiya-machi Miyagi-pref,Japan）

２００５年　６月の望遠鏡観測の結果を紹介する予定でしたが，６月分の報告がありませんでした。

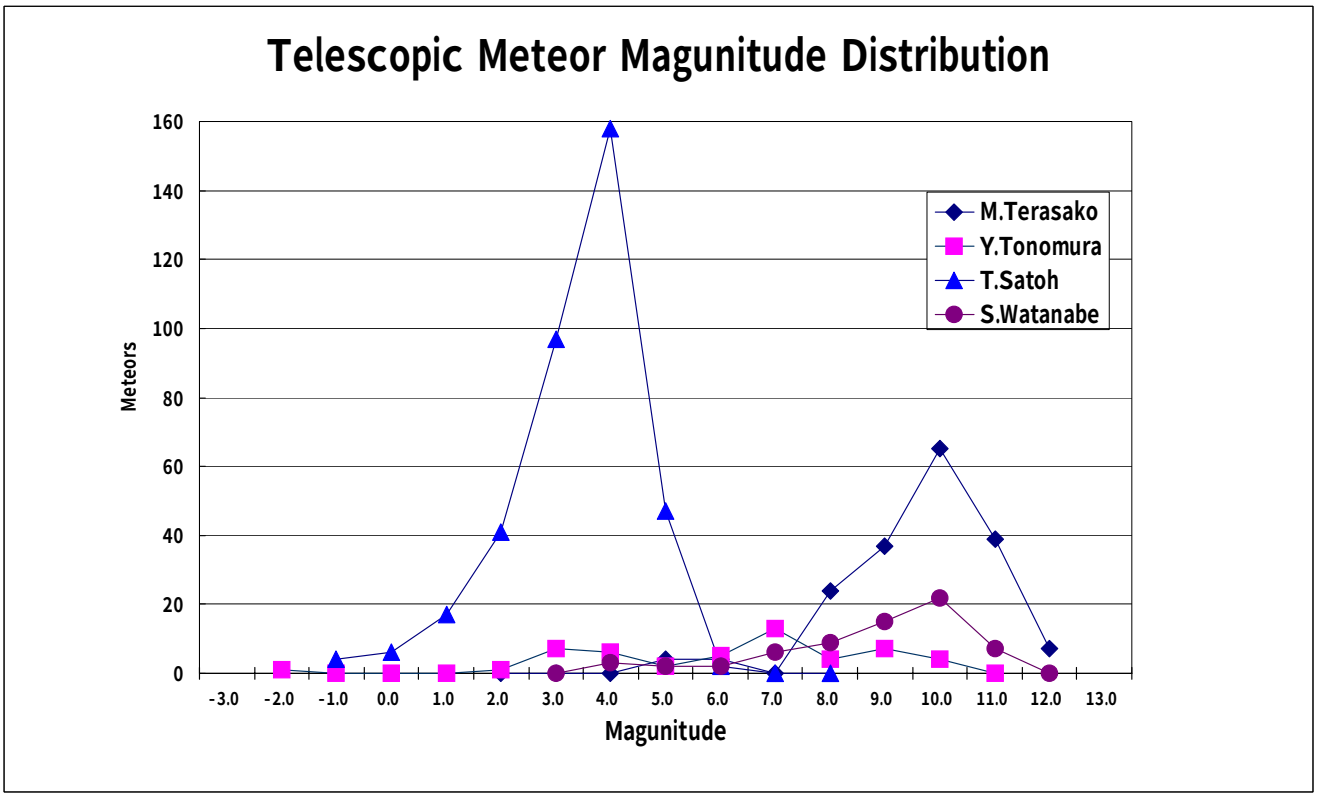
そこで今回は２００１年の望遠鏡観測（双眼鏡・ナイトスコープ）の光度分布を紹介します。

なお４氏以外にも報告を寄せていただいていますが，ここで紹介する光度分布は，寺迫氏，殿村，佐藤達雄氏，渡辺氏の４氏のみに限っています。他の観測者の結果は，今後ＨＰ上で紹介していきます。

	-3.0	-2.0	-1.0	0.0	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	10.0	11.0	12.0	13.0	Avg-Mag	Total
M.Terasako						0	0	0	4	4	0	24	37	65	39	7		9.62	180
Y.Tonomura		1	0	0	0	1	7	6	2	5	13	4	7	4	0			6.22	50
T.Satoh			4	6	17	41	97	158	47	2	0	0						3.35	372
S.Watanabe							0	3	2	2	6	9	15	22	7	0		8.79	66

（表－１）　２００１年望遠鏡観測による光度分布

Table 1　Magnitude distributions of the Telescopic Meteor observations in 2001



４氏の使用している器械について紹介します。

T.Satou　　Nikon NS（1×40°）

M.Terasako　15cm×25 2.7°Bino.　25cm×35 2.4°L.T.

Y.Tonomura　５cm×７ 7.3°Bino.

S.Watanabe　15cm×25 2.7°Bino.

表やグラフを見れば分かるように，使っている器械によって，捉えている流星の光度の違いが分かる。ナイトスコープは，４等程度の流星を捉えやすい。５センチの双眼鏡では，７から８等の流星を捉えやすい。１５センチ以上の口径では，１０から１１等の流星を捉えやすい。また，眼視観測でもあるように，観測者の流星を捕捉する能力，観測地の条件なども観測結果に影響するものと言える。１３等の流星を以前寺迫氏が捉えていたが，それ以下の流星が存在するかは，未だに観測報告がありません。流星が「地球大気と衝突して発光する」現象である以上，あまり小さい流星物質では，「発光」が起きないかもしれません。

なお，寺迫氏と渡辺氏の個人別の月別の光度分布については，望遠鏡分科会のＨＰ上で公開しています。